
スクルドの憂鬱とベルザンディの溜息

茅野春葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクルドの憂鬱とベルザンデイの溜息

【Nコード】

N3200N

【作者名】

茅野春葵

【あらすじ】

見知らぬ男に抱きつかれ「我が愛しの姫っ！」と叫ばれた。

その言葉になんだか嫌な予感がすると、とりあえずその男から逃げ出す事にするのだが……。

第一話

「ああっ！ 漸く巡り会えた！ 我が愛しの姫っ！！」

私は行き成りかけられた声に反応する間もなく、感極まった知らない男がガバツと広げた腕の中で、ギョツと強く抱きしめられた。突然の状況に思わずギョツとしたが、それもほんの一瞬だけ。

その後は慌てるでもなくただされるまま、強く抱きしめられたまま「あー、またか…」なんて思っていた。

意識は思わず遠いところへと旅立ち、それと同時に自ずと深い溜息が一つ吐き出された。

その間も知らない男は、私を強く抱きしめたまま何かを言っている。言っているなんてレベルではなく、感情がかなり高揚しているらしく叫んでいると言った方が正しいか。

とりあえず叫んでいる内容は、気にしない。

自分の想いのまま叫んでみたいだから、真面目に聞いていたって意味の分からない事なのは間違いないから。

そんな事に気をまわすより、他の事にまわした方がよっぽど有意義だ。

とりあえず、この現状どうにかしないと。

何せ今、私が立ち止まっている 立ち止まらされている場所は、駅前の人通りの多い広場。

小さな噴水があって、少し離れた所に数脚のベンチがあって常緑樹が道沿いに等間隔に規則正しく植えられていて、ほんの少しの休憩などに利用しやすい憩いの場だ。

そして、待ち合わせ場所にもうつつつけの場所。だから必然的に人が多く集まる。

否応なしに立ち止まっている私と、状況に気付いていない男を迷惑そうな表情を浮かべながら通り過ぎていく人達。

ほんの少しの興味を惹かれたのか、好奇心な視線を寄越す人。
ベンチに座っている人なんか、見世物でも見るような視線だ。
そんな人達の視線に私は晒されている。
はつきり言って迷惑でしかない。
私も、通行人も。

「あの一。そろそろ放してもらえませんか？」

私の声はちゃんと届くだろうか？

自分の世界に入り込んでしまうと、周囲の音は聞こえないっていうのがよくあるから。

「はっ！？ す、すみません。 姫にお会いできた事があまりにも嬉しく、思わず……。」

姫がこういう事が少し苦手だという事も失念しておりました。 申し訳ありません」

私に抱きついていていた男は言うが早いか、抱きついていて腕を放すと一歩後ろへと下がった。

そして背筋をピンツと伸ばし、綺麗な姿勢で頭を下げる。

今日日なかなか、そこまで綺麗なお辞儀する人はいないのじゃないだろうか。

そんな事を考えていた私だったが、強い視線を感じつついついそちらへと視線を向けてしまった。

視線の先には溢れんばかりの笑顔を浮かべた男がいた。

言うまでもなく、さっきの抱きつき男だ。

見るんじゃなかった。

なんて後悔しても、もう遅い。

バツチリと男と視線が合わさってしまったから、何も見なかったように逸らす事は出来ない。

仕方なく、男に話しかける事にした。

「あの……。もう少し離れてくれませんか？」

その瞬間の男の表情は、凄かった。

まるで死の宣告を受けたような 実際見た事はないので、勿論例えだけ。

一気に顔面蒼白となり、信じられないといった表情で私を凝視する。

「ど、どうしてですかっ！ 姫っ……！」

悲愴感を感じさせる声で叫ぶ男に、どうして一々叫ぶんだとツッコミたい。

お陰で更に注目を浴びてしまった。

当分この場所には近寄れないなあなんて思わず考えてしまったけど、そんな事考えている状況じゃないよね。

男はブルブルと震える手を私の方へとゆっくり伸ばしてくる。

このままではまた先程の再現になると、私は慌てて言葉を紡いだ。

「そ、それは……。は、恥ずかしいからですっ！」

「えっ……？」

男の手はピタリと止まった。

危なかった！

もう少しで掴まれる所だった。

私がホッと胸を撫で下ろしていると、言われた言葉を理解したのだらう男は、突如ふにやりと笑った。

どうしてそこで笑う必要があるの？

本当は問いかけたいけど、そこはグツと我慢する。

「そうでしたね。姫は恥ずかしがり屋さんでしたね」

男の目は遠い過去に想いを馳せているようだった。

視線は私を捉えているが意識は過去へと向いているらしく、望洋と
していた。

ああなるほど、さっきの笑いは思い出し笑いつて事なのかと気付く。
男が過去へと意識をやっている今が逃げるチャンスじゃない？

そう思つてゆつくりと気付かれない程度に後退をしたのだけ……。

「何処へ行くのですか、姫？」

やや強い口調で問われ、思わず止まってしまった。

何時の間に意識がこちらに戻つたのか。

もう少し過去の世界に意識を向けていてくれたら、逃げられたはず
なのに……。

スウツと眇められる視線に、本能的な危機を感じ取つた私は慌てて
喋りだす。

「えっと、その……。恥ずかしいので少し距離をとろうかと……」

「そうでしたか。それは気付かずに申し訳ありません。」

ですが、それでしたら私に仰ってください。何も姫自ら動く必要
は「ございません」

恭しく腰を折るその様子は、厳しく躡けられたのかと思うほどだ。
でも多分それは、半分正解で半分不正解だと思う。

出来れば全部正解の方が嬉しい。

本当にそうだったらいいのに。

「姫……?」

「あ、それなら少し離れてくれますか?」

「仰せのままに」

スツと優雅に一步後退をする抱きつき男。

「これぐらいの距離で如何でしょうか?」

「もう少し」

「はっ」

男は先程の様に、優雅に一步下がる。

そして同じように、私に伺いを立てる。

しかし私はまだ頷かない。

なので男は再度一步下がる。

それを何回か繰り返したところ、男がいよいよ難色を示しだした。

「姫、流石にこれ以上は……」

気付くと、男とは距離にして三メートル程離れていた。

本当はもう少し離れたかったけど、仕方がない。

相手に不審を抱かれては意味がないから。

「ありがとうございます。これだけ離れていれば大丈夫だと思います」

男を安心させるようにニコリと笑みを浮かべた。

「…っ! 姫っ!」

歡喜に打ち震える様に叫ぶ男を視界の端に入れつつ、私は素早く半回転すると勢いよく走り出した。

現実を受け入れられなかったのだろう。

五秒ぐらい経ってから遙か後方で、私の逃亡に気付いた男の「姫っ！？」という驚きを多分に含んだ叫び声が辺りに木霊した。

だが気にしない。

私は関係ない。

全くの無関係だ。

通行人を避けながら、余力を残す事は一切考えず力の限り精一杯スピード重視で走る。

只管走る。

逃げ切れる事だけを信じて。

第一話 (後書き)

ゆっくり連載になると思いますがお付き合い合いますとありがたいです。

第二話

「はあっ、はあっ、はあっ……」

肩で息をしながら背後の様子を窺う。

もうこれ以上走り続ける事は限界で、惰性で足が前へ進む事で漸く歩ける状態だった。

今此処で立ち止まったら、間違いなく当分歩く事もいや、立ち上がる事すら出来ないだろう。

体育の授業でも、ここまで真剣に走った事はない。

まあ、状況が違うから当たり前と言ったら当たり前なだけ。

とりあえず追ってきている様子はないみたいだからホッと安堵の溜息を吐く。

やっぱり、距離をとってからの全速力のお陰だろうと思う。

その代償として、明日は筋肉痛確定だろうけど。

それでもさっきの抱きつき男に捉まるのに比べたら遙かにマシだ。

筋肉痛なんかなんだっていうんだ。

喜んでなっつてやりますよ！

でも、出来ればならない方が嬉しいのだけど、この足の重さを考えると無理、だよねえ……。

とりあえず、家に帰ったらストレッチと足のマッサージしなきゃね。

あー、エアースロンパスもいるなあ。

家にあつたかな……？

なんて考えながら歩いていると、徐にポンツと左肩を誰かに叩かれた。

「ひあっ！！」

思わず飛び上がりそうになりながら間抜けな叫び声を上げると、

恐る恐る左後方へと首を動かした。

ギギギッと、まるで油の注されていないブリキ人形のようなぎこちない動きで。

まず視界に入ったのは、日に焼けると間違ひなく赤くなるであろう白っぽい肌。

そのまま視線を上へと上げていけば、光を受けると金色に見えてしまふ薄茶色のサラサラとした髪。

髪と同じ薄茶色で綺麗にカールされている睫。

驚きに丸くしている目はバツチリ綺麗な二重で、その瞳の色は海を髣髴とさせるウルトラマリン。

桜色の唇は笑うと柔らかな雰囲気を醸し出し、故に巷では『王子様』と言われている私の幼馴染　　琉果るかがいた。

「る、琉果るかか……。驚かさないでよ」

見知った相手にホツとしながらも、驚かされた事に対して思わず文句を言う。

所謂、八つ当たりというやつだ。

「ごめん。まさかそこまでビックリするとは思わなくて……。」

本当にごめんね？」

眉尻を下げて謝る姿は、なまじ顔が良いだけあって謝られている私の方が悪者のような気がしてくるから不思議だ。

だから顔が良いとこういう時は得かもしれないなあ、なんて思った事は数えられないほどだったりする。

ただ今回に関しては、琉果が悪いわけじゃないので謝る必要はないのだけだ。

「こつちこそ、ごめん」

謝罪の言葉を告げた後、首の位置を正面へと戻した。

ずっと首だけ後ろを向いたままだと、流石に痛くなってきたし。

こんな事で首が動かし辛くなるのは嫌だからね。

少しでも痛みを緩和させるべく、左手でむにむにと首の後ろをマツサージする。

その私の様子が可笑しかったのか、琉果がこつそりと笑っていた。気付いてないとも思っているのだろうか？

些かムツとしながらも、一体誰の所為よと思わなくてもなかったけど、ここは寛大な心で気付かないふりをしてあげる事にした。

そもそもの原因は琉果でも私でもなく、あの抱きつき男だからね。何時までも立ち止まったままでいるわけにも行かず、もう棒となりつつある足を叱咤しながらゆっくりと前へと歩き出した。

いつの間にか笑いを収め何事もなかったかのように繕った表情の琉果が、私の隣　　右横へと移動して同じスピードで歩いていた。

第三話

「別に謝る必要なんか無いのに。」

元々は、始めに声をかけなかった僕が悪いんだし」
「もういいの。その事は」

色々と事情があるからと、心の中で付け足した。

流石にあの事を琉果に説明するわけにもいかない。

出来たらこのままなかつた事として、記憶からも消し去ってしまいたい程だ。

その事を考えると、唯でさえ重い足が更に重くなってしまっからな
んとも不思議だ。

ああ、もう早く家に辿り着きたい。

「ねえ、どうしてそんなに疲れてるの？」

「えっ!?! そ、そうかなあ? 全然元気だよ!?!」

不思議そうに聞いてくる琉果に、慌ててニツコリと笑顔を浮かべて答える。

内心では冷や汗を垂れ流している。

琉果に突っ込まれるほど、疲弊した表情を浮かべていたのだろうか。
鏡があれば確認するのだけど、琉果がいるこの状況ではそれは出来ない。

そんな事をすれば絶対怪しまれる事は分かっているから。
でもそこは幼馴染。

しつかりと、何か私が隠し事をしているのを嗅ぎ取ったらしい。

「ふーん……。誤魔化そうっていうんだね？」

ねえ……。まさか『力』を使ったって事はないよね?」

私の隠し事の理由を琉果なりに推理して、自分の考え付いた理由に自然と眉間に皺が寄っていた。
それと共に琉果の雰囲気が少々怖いものに……。

「な、ないないないっ！！ 『力』なんか使ってないからっ！！」

即座に否定の声を上げた。

そうしないとどうなる事が……。
考えると一気に顔が青褪めてくる。

「そう？ ならいいんだけど」

私の否定を受けて、琉果の怖い雰囲気が瞬時に消え去る。

その事にホッと静かに胸を撫で下ろした。

『力』

私や琉果は、生まれもって私に備わっている癒しの力の事を変に人に勘繰られない様に『力』とだけ言っている。

実際癒しの力とはどういうものかという点、その名の通り人の怪我等を癒す事が 治す事が出来るのだ。

勿論、人に限った事ではなく動物にも効果があるらしい。

経験上人と動物には効果がある事を確認しているけど、それ以外の生物には使った事はないのでとりあえず、人と動物と自分の中では認識している。

その力は普通の人には備わっていないもの。

現実世界では私のような癒しの力や魔法、超能力なんていうのはお話だけの存在なのだ。

その事に気付いたのは私がまだ幼かった頃。

いや、実際に気付いたのはもつとこの世界の事を分かりだした頃だ
と思う。

小さい頃、お兄ちゃんに『その力は無闇に使っても、人に見せても
いけないよ？ そうじゃないと怖い人に連れ去られて二度と帰って
これなくなるからね』と何度も何度も言われて。

事有ることに言われ続ける言葉は、まるで私の意識の中に刷り込む
ようで。

お兄ちゃんがどうしてそこまで必死なのかはその頃は分からなかつ
たけど、幼心に『連れ去られる』という事と『帰ってこれなくなる』
という事が怖かった。

だから、その言いつけを忠実に守ってきた。

でもそこは子供。

詰めが甘い。

ある夏の日、近所探検だと勢い込んで散策していた私は巣から落ち
た一羽の小鳥を見つけた。

羽が傷つき、巣に戻る力がない小鳥。

『ピイピイと力なく囁くその声が』痛い、痛い』と泣いているように
聞こえて。

その声を聞いてしまうと、どうにか助けてあげたいと思ってしまう
た。

このまま放置していれば、間違いなく小鳥は死んでしまうだろう。

きつく何度もお兄ちゃんに注意されていたが、この目の前の小鳥を
見捨てる事はどうしても出来なかった。

だから周囲を注意深く見回して、辺りに人がいない事を確認してそ
れでも用心して木の陰に隠れて小鳥の傷を治す為に力を使った。

だが、運悪く力を使っているところを疏果に見られてしまっていた
らしい。

傷が治った小鳥が元気に巣へと戻っていく姿に、ホツとし嬉しい気
持ちになった私はいつの間にか傍らに人が立っている事に気付いた。
それが人で、しかも少年だと気付いた私は、見られた事実でそこで

初めて気付いたのだ。

お兄ちゃんという言葉を出し、恐怖からか自然と溢れてくる涙。私は泣きながら必死に、琉果に黙っていてと叫んだ。

琉果はそんな私の様子に慌てるでも逃げるでもなく、泣き叫ぶ私を慰めるように落ち着けるように、優しく何度も何度も頭を撫でてくれた。

それがやけに心地よく、泣き叫んだ疲れと力を使った事もあってか知らないうちに私はそのまま寝入ってしまったらしい。

目が覚めれば自室にいて、目の前にはお兄ちゃんがいた。

一体どうしてと思ったものの、先程の光景を思い出し思わず固まった。

恐る恐るお兄ちゃんに視線を合わせる。

お兄ちゃんは笑顔を浮かべていたが、その目は一向に笑っていないかった。

あの笑顔は幼心には厳しすぎる。

『約束、していたよね?』と言われた言葉に、恐ろしさでブルブル震えながらそれでもなんとか言葉を発した。

『あのままでは小鳥が死んでしまう。自分が二度と帰ってこれなくても、小鳥が死ぬ事に比べたらマシだ』と泣きながら言った記憶がある。

そんな私に『困った妹だ』と苦笑を浮かべながら、お兄ちゃんは数回私をあやす様に頭をポンポンと叩いた。

その事で許されたと思った私は、わんわんと泣きながらお兄ちゃんに抱きついた。

お兄ちゃんもギュツと私を抱きしめながらボソボソと何かを呟いていたけど、泣き喚いている私にはお兄ちゃんの呟きは聞こえなかった。

琉果はあの時の私のお願いを聞いてくれたのか、それとも後にお兄ちゃんが何か言ったのか分からないけど、私の力の事は誰にも言っていないそうだ。

それどころか、お兄ちゃんと同じように『無闇やたらと力を使わないように』と言ってくる始末。

流石に力の危険性を十分理解しているから、あの時のような無茶はもうしなくなった。

それでも時折、琉果やお兄ちゃんは力を使ってないかの確認をしてくる。

今もそう。

心配してくれるのはありがたいけど、もう少し私の事信用してくれたいのに。

そう思ってしまうのは、我儘なのだろうか？

第四話

「だったら、どうしてそこまで疲れているの？」

「おかしいね」なんて呟きながら相変わらず何かを探るような視線で私を見る琉果に、思わず笑顔が固まりそうになる。

い、言えない絶対。

ここはなんとかして誤魔化さないと。

でも敵もさる事ながら、追撃の手を緩めなかった。

「確か駅前の本屋に、新刊買いに行くって言ってたよね？」

三ヶ月前から楽しみにしていた本だったよね？

でも見たところ、本を買ってないよね？ どうして？」

ああ、そうだったっ！ 琉果に指摘されて今思い出した！

すっかり忘れていたけど、本を買いに駅前まで来ていたのだった。

三ヶ月前から今日という日を楽しみにしていたのに！

あの抱きつき男の所為で、結局購入出来なかった……。

当分の間、此処には近寄る事は出来そうにもないし。

どうしよう……。

あれだけ楽しみにしていたのだから、どうしても欲しいっ！

でも、あの場所には近寄りたくない。

そうなる自分が買いに行けないのだから、誰かに頼むしかないよね？

お兄ちゃんにお願いしようか……。

でも、出来たら今日欲しい。

何せ楽しみにしていた本だもん。
うーん……。と悩みつつ、横にいる琉果へとチラリと視線を向ける。
琉果に頼んでみようかな。
なんか色々と間違いなく聞かれそうな気がするけど、そこは上手い
事誤魔化して 誤魔化しきれるかは、正直微妙だけど。
それでもやつぱり、諦める事なんか出来ない！

「ねえ、琉果？」

「ん？ 何？ 正直に話す気になったの？」

ニツコリ笑顔を浮かべてますが、琉果さん……。
目が全く笑っていませんよ？

……。
迫力に負けて思わず視線を逸らしたくなったけど、逸らしてしまう
と『何かやましい事があります』と告げているようなものなので、
根性で耐えぬきます。
根性なんて私の柄じゃないけど、そこは本の為に頑張る！

「いや、あのね、実は……。」

お、お財布うつかり忘れちゃってさあ。あは、あはははは。

買おうにもお金なくってさ。何せお財布持ってないんだもん。当
たり前だよな？

それで今、お財布取りに帰ろうとしていたところなの、うん。そ
うなのよー！

「……ふーん。そうなんだ？」

「うん、そうなの！」

おお！ 我ながらに良い考え！

これなら走って家に取りに帰る途中で、走りすぎて疲れているって

言ってもおかしくないし、しかもお金がないから琉果に頼んでも全く不自然じゃない!!」

「それでね、琉果……」

「お金貸そうか？」

「あ、ありがとう!!」

さすが琉果!

嬉しさのあまり、思わず抱きついてしまいそうになるけどそこは抑えました。

だってこんなところで抱きついたら、あの抱きつき男と大差ないじゃない。

これ以上、目立つ行動は抑えないと。

だって、ただでさえ琉果が隣に居るだけで女性の視線を集めてますから。

流石は『王子様』だ。

でも本人は全く気にしていないのよね。

以前『琉果って相変わらず注目を浴びてるよね』って言ったら『不特定多数の人より、自分の大事な人に気にしてもらいたいよ』なんて顔を少し赤らめて言っていました。

恥ずかしがっているその様子も絵になってたのだから、本当凄いや。でも、まあ琉果の言いたい事は分かる。

やっぱり自分の大事な人には、自分の事をちゃんと見て欲しいものね。

うんうんと同意の意味を込めて頷いていたら『本当に分かっているの?』なんて疑わしい目で見てくるのよ、本当失礼しちゃう。

ムツとしながらも『ちゃんと分かっているわよ!』って言い返したら『だったらいいけどね』なんて軽く流すし。

幼馴染だからって、少しぞんざいに扱いきすぎじゃないの? ってその時は思ったけど。

なんて過去へと想いを馳せている場合じゃない。

今は本、本なのよ！

今日中に購入して、今日中に読みたいのだから無駄に時間を浪費するわけにはいかないのよ。

琉果に本のタイトルを伝えて、買ってきてもらわなくちゃ。

とりあえずメモ紙にでも書いて……と、鞆を開けようとした私の手を、琉果が徐に握る。

ん？ 紙に書く必要はない、口頭で十分って事？

まあ琉果がそれでいいなら、別にいいんだけどさ。

ところが琉果は私の手を握ったまま、元来た道へと引き帰す。つて、ちよつと待って！？

私は慌てて両足を力を入れると、先に進まないように踏ん張った。当然琉果の足も止まる。

「どうしたの？ 買いに行くんだよね？」

「そうだけど、琉果だけ行って来て」

「なんで？ 一緒に行ったらいいじゃない。僕、ちゃんとお金出すよ？」

「本のタイトル、紙に書いておくから、ね？ お願い」

頑なな私の様子に、じーっと疑惑の目を向けてくる琉果。

幾ら見られても何も喋らないから！

「なんでそんなに行きたくないの？」

それを言うと、此処までの私の頑張りが無駄になります。なので勿論無言。

「もしかして……。僕と一緒に行動したくないって事？」

悲しそうな表情と寂しそうな声音で呟いた琉果。

それと同時に背筋に悪寒が……。

これは周囲の女性の視線、だよね……？

なんか殺意というか、怨念というか薄ら寒いものを感じるんですけど。

このままだと無事に帰れそうにも、本を手に入れられそうにもない気がする。

「琉果と一緒に行動したくないわけじゃないの！！

その、えーっと、えーっとね。

う、占い！！　そう、占いで今日駅方面に向かうと大変な事になるって言うって、だから……」

ええ、我ながら苦しい言い訳だと思います。

でも、他に何も思い浮かばなかったもの……。

それに駅方面に向かって、既に大変な目にあっただしねえ……。思わず遠い目になる。

そんな私の様子に琉果は、先程までの悲しそうな表情を消し去ると、真剣な表情で私を正面から見据えた。

「そこまでして、本屋に行きたくない理由って何？」

いや、だからね、それを言うわけにはいかないんだって！！

どうして分かってくれないのかなあ。

ああ、困ったと考え込んでいた私は気付かなかった。

いつの間にか、私の背後に人がいた事なんて。

「そこまでしてもらおう」

突如聞こえた声に「え？」と思う間もなく、背後から力強く引つ

張られる。

琉果も行き成りの事で、私の手を握っていた力を緩めてしまったのだろう。

私の手はスルリと琉果の手から抜け出ると、背後から引つ張った人物の腕の中へと身体ごと移動した。

「え？ え？」

一体何が起こっているのだろうか？

あまりの展開に、頭が混乱している。

そんな状態の私を、引つ張った誰かは力強く抱きしめると言った。

「大丈夫でしたか？ 姫？」と。

第五話

聞こえた声に、混乱は最高潮を迎えた。

え？ もしかしてさっきの抱きつき男！？

サーッと一気に青褪める。

折角逃げられたと思ったのに、ぬか喜びだったの！？

とりあえずこの拘束から逃げようと身体を力いっぱい暴れるように動かすのだが、残念ながら抱きしめる腕が外れる事はなかった。

それどころかますます強く抱きしめられる。

自分ではどうする事も出来ない、他力本願で大変申し訳ないけど琉果に助けを求めようと思った。

幼馴染が行き成り男に抱きしめられてそれを嫌がっていたら、流石に助けてくれるよね？

そうして琉果へと助けを求めなるべく視線を移すと、そこには呆れたように私を見ている琉果の視線があった。

呆れてる？ どうして？

でも呆れるなら、助けてくれる気はないって事よね。

あー……。やっぱり自分で何とかするしかないって事が。がつくりと内心で頂垂れる。

頂垂れたままでも状況が改善するわけでもない。

さて、どうしようかと考えようとしたところで、少しおかしな事に気が付いた。

私を見ていた琉果と、琉果を見ていた私の視線がどうして合わなかったのか。

その答えは、視線同様呆れた声で言った琉果の言葉の中にあった。

「もりみず杜泉、もうその辺で解放してあげてたら？」

ん？ もりみず杜泉って……。 ゆり侑璃ちゃん！？

後ろから私を抱きしめている人物を確認すべく、なんとか身体を捻る。

そうして振り向いた先の視界に入ったのは、羨ましい程のサラ艶ストレートの黒色の髪。

そのまま視線を上へとずらすと、ニツコリと笑顔を浮かべた侑璃ちゃんがいた。

もりみずゆり
杜泉侑璃。

私の友達の女の子。

友達というよりは親友の方がしっくりくるかな。

侑璃ちゃんはどう思っているか分からないから、私の一方通行かもしれないけどね。

琉果程ではないけど、侑璃ちゃんとの付き合いも結構長くて小学生からの付き合いになる。

勿論、その付き合いは言うまでもなく今でも続いていて、気が付いたら自然と琉果と三人でいる事が結構多い。

だからか琉果と侑璃ちゃんは、私の中では心置きなく付き合いえる家族に近い場所に位置している存在になっている。

「もう、侑璃ちゃん苦しいよ」

頭一つ分私より高い侑璃ちゃんを見上げながら、手を緩めてくれるようにお願いする。

「うふふ。役得役得。代わってあげないわよ？」

語尾にハートでも付いていそうな楽しそうな声で言ってるけど、全く返答になってません。

私と会話してるよね？ それとも聞こえなかったのかな？

たまに侑璃ちゃんは誰と会話しているんだろうと思うような事を言

う。

とりあえず『何?』って聞き返すのだけど『何でもないわよ?』と、いつも流されてしまうので最近では聞き返す事を止めている。

たまーに、本当にごくたまーにどういう意味なの? ってツッコミたくなる事があるんだけど、返答はないので何時も自分の心の中だけで突っ込んで終わり。

そう、さっきの発言の役得ってところとかね。

一体何処が? と心中盛大にツッコミながら、ますますギューッと強く抱きしめてくる侑璃ちゃんに、ギブギブと腕を数回叩いた。

身長百七十センチとモデルさん並みの高さの侑璃ちゃんの腕は、頑張って百五十後半に届くか届かないかの私の首に上手い事かかっている為、力が入るたびに首を絞められる。

一体何の嫌がらせよって思うのだけど、侑璃ちゃんには全く悪気はないのです。

せめて私の身長がもう少し高かったらこんな事にならなかったのかなあと、酸欠になりつつある頭で考える。

そんな状態で思い出すのは、度々侑璃ちゃんと論争になる身長の高低問題。

侑璃ちゃんは『女の子は背が低いほうが絶対可愛い』って一步も譲らず。

私も私で、身長が高い方が絶対いいと言って譲らず。結果、私と侑璃ちゃんとの意見は永遠に平行線のまま。

でもここに琉果が加わると、私が一気に劣勢となる。

琉果も百八十センチちよつと身長があるものだから、長身の不便さを懇々と言い連ねて最終的に私ぐらいの高さが丁度良いで締めくくるとのだ。

それに賛同を得たとはかりに、意気揚々と侑璃ちゃんが言ってくるものだから私の反論は威力半減。いやもつとかもしれない。

だから私の味方も見つけなくちゃって思っているんだけど、それが中々見つからない現状だったりする。

とりあえず今は味方云々の話は別にいいの。

私が言いたいののは、少なくとも身長が高かったら、こんな状況にはなっていないよね？ って事。

侑璃ちゃん……。

流石に私、限界です……。

第六話

視界はぼやけ、危うくそのまま意識が遠のきそうになった。違う世界へと行きかけた　　半分ほどは行っていたけど。私の拘束が不意に緩まる。

ああ、漸く気付いてくれたのね侑璃ちゃん。喉への圧迫がなくなった事で、ゴホゴホと自然と出てくる咳。それと共に目尻に浮かんでくる涙を手で拭いとる。

侑璃ちゃんが罪悪感を感じなければいいけど咳を数回しながら、あの暴走状態では私の状況なんて間違いなく気付いていないだろうから琉果が助けてくれたんだろうなと思った。

たまに暴走する侑璃ちゃんのストッパー役は、何時も琉果だ。何故が大抵の暴走原因が私なので　　本当に謎なのだけ。私ではストッパー役になりえない。

だから琉果がいる時は、自然と琉果がストッパー役になってしまう。何時も申し訳ないなあって思うんだけど、こればかりは私ではどうする事も出来ないのて甘えさせてもらっている。

琉果自身からその事に関して文句を言われた事はないので、余計なのかもしれないけど。

咳も漸く治まり、ポーっと霞がかったような頭も段々とはつきりしてきた。

とりあえず侑璃ちゃんの腕の中から出ないとまた同じ事になるからねと抜け出そうとしていた私を、今度は誰かが前から抱きしめる。

侑璃ちゃんから奪うように。

私を抱きしめる腕は優しくかったけど、雰囲気は少々優しくなかったので奪うようになって感じたんだだけ。

琉果にしては少々強引だな、と思った。

それ程今回の侑璃ちゃんの暴走は酷かったのかと、思わず苦笑を浮かべる。

まあ確かに、酸欠になるくらいきつく抱きしめるのはちょっと酷いよね。

でも、そんなに心配しなくても大丈夫だよと伝えようと顔を上げて、私はその姿勢で固まった。

私はてつきり琉果だと思っていたのだ。

だって琉果しか考えられなかった。

だが実際私を抱きしめていたのは、どうしても本気で思いたくなる人物　　駅前で行き成り抱きついてきた男だった。

逃げ切れたと思っていたのに。

呆然と男を見つめる。

男は最初、心配そうに私を見下ろしていたのだが、私と視線が合うとホッとしたようで安堵の表情が浮かべた。

でも驚きに固まっている私が、そんな事に気付く筈もなく。

それどころか瞬きするのも忘れるくらい、男の顔を凝視していた。

その凝視していた男の顔が段々と近づいてくる。

え？　え？　なんて思っている間にも近づいてきて、気が付いたら頬に何かが押し当てられる感触が。

……え？

しかもその感触は一度だけじゃなく何度も何度も……。その感触には覚えがある。

小さい頃には両親やお兄ちゃんに何度もされた、愛情の行い。

家族や百歩譲って近い人ならまだ納得は出来る。

でも、相手は見ず知らずの人間。

それどころか行き成り抱きついてくるといって、痴漢行為に近い事を平然としてくる人物。

なんでそんな人物からキスをされなきゃいけないの？

混乱していた思考が漸くまともに動き出す。

「止めてくださいっ！」

拒絶の言葉と共に自分の腕を前へと突っ張りだし、なんとか男の腕の中から出ようとした。

しかしやっぱりというか男の力は強く、私がどんなに力を籠めて腕を前へと押し出しても離れるどころか一センチの隙間すら作れない。でも拒否の声と暴れたお陰か、男からのキスは止まった。

なら次はこの腕の拘束から抜け出さなくてはと目に力を入れて、男をキツと睨む。

睨んだのだけど……。

男は怯むどころか熱に浮かされたような、燻る炎を瞳に宿した視線でじっと私を見ていた。

その視線を真っ向から受けた私は、肌が粟立つというかゾクリとするというかとにかく、説明し辛い感覚に襲われた。

「ああ、やはりあなたの匂いは甘く私を蕩けさせます。そしてこの肌も……」

言葉と同時に私の頬をスーツと撫で上げる男に、ますますゾクリとする感覚。

悪寒に似ているかもしれない。

「あなたの身体の全てが、到るところが甘い。甘美な果物よりも……、いやこの世にある全てのものすらもあなたには敵わない。

あなたと一つになって二人で乱れ溶け合いたい……」。

そう。満月の夜のあの日のように。いや、あの日以上に……」

な、にを、言っているの……？

言葉はちゃんと頭へと入ってくるけど、あまりの内容に意味を理解したくないと脳が拒否をする。

男は完全に一人で妄想の世界に、悦に入っているらしく、何のリアクションも返さない私を気にする様子もない。それでも、抱きしめる腕の力だけは緩まない。妄想するなら一人で家に帰ってやって欲しい。迷惑だ、大迷惑だ。

どうして私がこんな目に合わなきゃいけないの？

自分の置かれた状況に、やられた行為に今頃になって沸々と怒りが沸いてきた。

男に怪我をさせたら嫌だからと遠慮していた部分もあったが、本気で殴るぐらいの勢いで抵抗してもいいだろう。

抱きついたり、キスしてきたりなんて、完全痴漢行為だ。

だから多少、私が男を傷つけてもそれは正当防衛だ、正当防衛。ずっと止めてと言っていたのに、止めない男が悪いのだ。

よし、と自分に気合を入れると、未だ悦に入っている男へと視線を移す。

狙うのは　顎だ。

下から渾身のアッパーでも繰り出せば、流石に男は怯むだろう。

その隙に腕の拘束から何としてでも抜け出る。

頭の中で数回シュミレーションすると、拳を作りグツと強く握り締める。

あとはタイミングを見てこの拳を上突き出すだけだったのだが、残念ながらその機会は訪れる事はなかった。

「いい加減に離さんかーっ！！　このっ、ド変態がーっ！！」

突如辺りに、空気を震わさんばかりの怒声が響き渡ったからだ。

第六話 (後書き)

思ったより話が長くなりました。
2千文字以内で収める予定が…。

第七話

怒声の発声元は侑璃ちゃんだった。

でもそれに気付いたのは彼女の姿を私の目が捉えたから。

そうじゃなかったら、きっと誰が発したかなんて気付かなかったと思う。

それ程迫力もあつたし、声質もワントーンどころかかなり低くて普段と全く違っていたから。

侑璃ちゃんはとても素敵なおみ足を出し惜しみする事なく、私を腕の中に拘束していた。あれは完全なる拘束です、誰がなんと言つても拘束なのです。男を回し蹴りで勢いよく吹き飛ばしていました。

その後に関こえた『ドゴツ…』という音は、蹴り飛ばされた男が何かに当たった音で間違いないと思う。

かなりの轟音だったけど、侑璃ちゃんはそんな音なんて全く聞こえていないとばかりに「ふう」と軽く息を吐いて、背中の中まである艶やかな黒髪を「ファサツ…」と一仕事終えたかの様にかき上げていた。

その仕草はまるで一枚の絵画のようで。蹴り飛ばすところさえ見なければ。そしてその後の轟音も聞こえないければ、だけど。

ちなみに蹴り飛ばされた男は三メートル程先の電柱に背中を預け、頭垂れたように頭を下へ向けて座り込んでいた。

三メートルってふつ飛びすぎじゃないかと思うけど、そこはスルーで。侑璃ちゃんのキック力が強いなんて指摘でもしたら、後で大変な事になるからね。

その姿は、傍から見ると某漫画の真っ白に燃え尽きた人の様で。

違う意味で燃え尽きかけているような気がしないでもないけど、そこは気にしない方向性でいいと思う、うん。

第一、自業自得だしね？

そんな事が瞬く間に起こり、気が付いたら私は琉果の腕の中にいた。

そう。

私の視界は突如変わり、少し空へと近くなつた事に『え？』と思つた時には侑璃ちゃんの白い綺麗な足が翻るところが視界の端で見えて。

『え？ え？』なんて思っていたら、蹴り飛ばされる男と『ドゴオツ』という音が聞こえて……、以下略と。全て琉果の腕の中で見た事だ。

一步間違えれば私も吹き飛ばされるところだけど、そこは侑璃ちゃんと琉果の見事な連携があるからこそ、出来た事。間違いなく私では、どちらの代わりも務まらない。

情けないけど、それは揺るがしのない事実だったりする。

勿論、経験を踏まえた上での見解だ。

そんなどうでもいい事を、つらつらと琉果に抱き上げられたまま考えていたりする。

所謂 現実逃避というやつだ。

それも仕方ないと思う。

だって私は今、琉果に『お姫様だっこ』なんてこつ恥ずかしい事をされているから。

世の中の乙女と言われる何割かの人は、間違いなく憧れているものだと思う。

私だって憧れがないわけではない。

でもそれは、結婚式の時にチャペルで好きな人にされたらいいなあという程度の憧れであって、今ではない 決して。

だからこれは羞恥プレイの何ものでもないのだ、私にとっては。琉果はいいよ。

巷で『王子様』なんて呼ばれているぐらい外見が日本人ぽくない。

ぽくないどころではなく、外見はアングロサクソン系だ。

だから、変に浮く事もない。

それに恥ずかしがる様子なんか微塵も見せる事なく堂々としているから、余計さまになっているし。

これで抱き上げられているのが私じゃなかったら、もっと良かったんだけどね。

あーあ……。

当分の間は家と学校だけの行き来しか出来ないなあ……。

一体なんでこんな事にと、心労を吐露するように深い深い溜息を一つ吐いた。

それが聞こえたのだろう。

琉果が心配そうな表情で、私の顔を覗き込んでくる。

「大丈夫だった？ ごめん、助けるのが遅くなって……。

まさか杜泉があんな行動に出るとは思わなくて。少し考えれば分かる事だったのに……。本当にごめん」

言いながらみるみるシユンとなって自己嫌悪する琉果。

別に琉果が悪いわけじゃないのに、どうしてそこまで落ち込むかなあ。

出来れば早めに侑璃ちゃんを止めてくれればこういう事にはならなかったのだからうけど、それは今だから言える事であって、だからと言って止めなかった琉果が悪いわけじゃない。

なのに、こうやって自分が悪いと落ち込む。

琉果は変なところで責任感が強いから、なんでも自分が悪いと抱え込んでしまうのよね、昔から。

そういうところは幾つになっても変わらない。

そしてこれからも変わる事はないのだろう、きっと。

なんて事を暢気に考えている場合ではなかった。

落ち込んだ琉果を慰めないよ。

琉果は誰かが慰めてその自己嫌悪を止めてあげないと、際限なく落ち込んだままだったりする。

だから誰かが慰めなくちゃいけない。

大抵その慰め役は私だったりするから、そう考えるとこれも昔から変わらない事になるんだよね。

大きくなるにつれて色々と変わる事はあるけど、幾つになっても変わらないやり取りがあるって、くすぐったくもあるけどなんかいいよね。

それが自分一人だけじゃなく、他の人と一緒だっというのなら尚更。もっともつと歳をとって、その時昔を思い出して語り合えたら素敵な事じゃないかな？

なんて考えて、思わずクスリと笑み零した。

第七話 (後書き)

お気に入り登録50件超えてました。
ありがとうございます。

展開がゆっくりですけど、これからもよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3200n/>

スクルドの憂鬱とベルザンディの溜息

2010年11月21日11時52分発行